

## 「千の風になって」

「千の風になって」が多くの人の心に吹き渡っている。わたしも写真 (Amazon.co.jp) の、いわさきちひろさんによる美しい絵本を机におき、空を見上げてよく口ずさんでいる。

卒業生の父親が癌で亡くなった。わたしと同じ年である。亡くなる1週間前、一度だけホスピスでお会いすることができた。痛みをこらえ必死に話されたこと、別れ際に握手したときの手のぬくもりが今も忘れられない。もっとも愛着のもてる卒業生の父親であり、前から私のことを気に留めてもらっていたようで、お会いして短時間ながら話ができ感謝している。偲ぶ会が行われたが、残念ながら参加できなかった。わたしも偲ぶ言葉を書かせてもらったが、その綴りの綺麗な表紙には「千の風になって見守っていてね」と書かれている。偲ぶ会でも「千の風」の曲が流れ歌われたそうだ。

じつはお会いしてから、2回手紙を出したが、なんとか病床で読んでもらえた。3回目の手紙を書き始めたが、うまく書けなかった。「あれから40年」というレポートも書き始めたが、途中で終わっている。「千の風」になって、最初だけ紹介しておこう。

ことは2007年である。大学の「サイクル」で生活していると、どうも時の流れが早く感じられる。大学入学が1967年だから、あれから40年もの歳月が流れた。

どうして「あれから40年」というテーマで書きたくなったのか。これには少し「わけ」がある。わたしと同年齢の卒業生の父親が、末期の癌を患っている。卒業をひかえた時期に話を聞き、ずっと気になっていた。同年齢であり、なにかと「親近感」もあり、ホスピスを訪ねたり手紙を出したりして、わたしの気持ちを少しでも伝えられた。こんなわけで40年前のことが気になって、思いつくまま書き始めたのである。なにか書き残しておきたい、という気持ちに駆られて。-----



(2007年8月15日 記)